

幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

幼児期における情緒形成の基礎的研究

研究協力者 竹 中 和 子（広島県立保健福祉短期大学講師）

下 見 千 恵（広島県立保健福祉短期大学助手）

片 山 美 香（呉大学看護学部講師）

主任研究者 清 水 凡 生（呉大学看護学部）

論文要旨 本研究は、新生児期（第1回調査）と乳児期前期（第2回調査）における乳児の行動特徴と、母親がとらえている乳児の性格や養育姿勢との関連について検討し、支援の方向性を考察することを目的とした。第1回調査では、68組の健康な新生児とその母親を対象に、看護者による行動特徴評価および授乳場面における相互作用評価と、母親に対しての質問紙調査を行った。第2回調査では、第1回調査で協力に同意した母親に対して郵送法による質問紙調査を行い、33名から回答を得た。その結果以下のことが明らかになった。（1）乳児期前期までは、乳児の行動特徴には依然授乳の状態や身体生理の状態が反映していた。成長・発達とともに乳児の行動特徴は明確化しているが、母親の受け止め方は流動的で支援の可能性が期待される。（2）母親による「赤ちゃんの将来」への思いは、新生児期、乳児期前期ともに漠然とした内容が多かったが、後者では不明とする回答がなかった。乳児期前期までは、母親自身の経験やパーソナリティ等が反映していると予測されるが、今後わが子の個性がより明確に認識されるようになると実際の養育姿勢として示されると考えられる。（3）乳児の身体生理の状態が不安定であったり、分娩経過や授乳等で母親の疲労度が高いことが予測されるケースでは、母親の乳児の受け止め方や養育行動への影響が予測され、特に乳児期前期までの母子相互作用や母親への心身への支援の重要性が示唆された。

問題と目的

乳児は生後まもなくから有能で個性的である（クラウスとケネル，古澤，古沢）。いいかえれば、乳児が単に養育者から影響を受けるだけではなく、乳児の様々な反応が養育者に影響を与えているということである。新生児期における乳児行動特徴についてはブラゼルトンの新生児行動評価（NBAS）があるが、評価者が限られることや簡便でないことで普及しにくい。また、新生児期は外的環境への適応期間であるということで環境要因の影響を受けやすく、新生児ひとりひとりの個性をとらえるということは経験的レベルに留まっている。また、新生児期からの行動特徴がその後の人格形成にどうつながっていくかということについて縦断的、系統的に明らかにされた研究はない。

子どもの個性を豊かに育てていくことは、養育者にとっても、家族にとっても、そして社会にとっても一つの大きな目標である。しかしながら、実践するのは容易ではない。私たちは、いつ頃から、どのようにして子どもの個性をとらえているのであろうか。果たして、真にひとりひとりの個性を受け止め大切に育てているのであろうか。

養育者は相互作用を通して乳児の行動から特徴を認知し、その子どもの性格としてイメージしていくと考えられる。養育者の「この子はこんな性格」という受け止めは、育児姿勢に反映して相互作用が展開していく（図1）。乳幼児行動特徴は、1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月時で一貫していたという研究結果もあるが、さまざまな要因で変化しているという報告もある。また、養育者の「どのような子どもに育てたいか」という養育姿勢は、養育者自身のパーソナリティや育児経験、家族関係等を基盤としているが、日々の相互作用を通して変容していく。つまり、養育者はそれぞれ養育姿勢をもって育児に臨み、子どもの情緒発達や人格形成に大きな影響を与えているが、必ずしも養育者の思惑通りにはならず、子どもの個性に影響され変化していくと考えられる。

本研究では、新生児期と乳児期前期における乳児の行動特徴と、母親がとらえている乳児の性格や養育姿勢の関連について検討し、支援の方向性を考察する。

幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

用語の操作的定義

赤ちゃん：

新生児、乳児に対応することばであるが、ここでは、主としてわが子としての新生児、乳児とする。

養育者：

ここでは両親をさし、看護者は含めないものとする。

看護者：

看護婦（士）あるいは助産婦あるいは保健婦（士）とする（以下Ns.）。

行動特徴：

特に乳児および年少幼児の場合に気質や性格特性に対応するものとする。

養育姿勢：

「どんな子どもに育てたいか」という養育者の思いや態度とする。

研究方法

1. 第1回調査（新生児期）

1) 被験者

出生より10日目までの健康な新生児（在胎週数 37w5d 42w6d, 生下時体重 2,672g 3,666g, Apgar score 9点以上）とその母親（初産婦34名, 経産婦34名/年齢19歳 39歳, 平均年齢28.5歳, SD=4.11）68組

2) 調査期間

1999年2月 1999年4月

3) 調査場所

Y 医院および M 病院産科病棟および新生児室（Y 医院は母児同室制, M 病院は母児別室制をとっている）。

4) 質問紙

新生児行動特徴評定表

新生児の行動特徴をNs.が評定するもので、ブラゼルトンの新生児行動評価（NBAS）4の評価内容や、庄司らの「新生児行動様式質問紙」の項目を参考に検討して作成した。新生児の身体生理的状态に関連した9項目と反応性や泣きなど心理的状态に関連した項目15項目の計24項目からなる。各項目は「全くあてはまらない」から「あまりあてはまらない」、「どちらともいえない」、「ややあてはまる」、「非常にあてはまる」の5段階で評定する。

新生児と母親の相互作用評定表

授乳場面における新生児と母親の相互作用

に関するもので、母子の応答性を問うている2項目と主として母親の赤ちゃんへの働きかけを問うている2項目、母親の疲労について問うている1項目の計5項目からなり、「新生児行動特徴評定表」と同様に、5段階尺度で評定する。

母親に対する育児に関する質問紙

「赤ちゃんの性格」、将来への思い、「赤ちゃんに対する行動特徴の認知」についての項目からなる。は文章完成法、は5段階尺度による回答の方式をとった。また、の項目は、看護者による「新生児行動特徴評定表」と一部対応した内容とした。

5) 手続き

同一新生児について看護者1名または2名が、「新生児行動特徴評定表」にしたがって生後2日目以降にそれぞれ評定を実施した。新生児行動評定の一致率の平均は.90（.81-.98）であった。

同一組みの新生児と母親について、看護者1名または2名が、それぞれ「授乳場面における母子相互作用評定表」にしたがって、生後4日目より退院までの期間実施した。母子相互作用評定の一致率の平均は.91（.72-1.0）であった。

各施設の看護者が退院前の母親に質問紙を個別に配付し、退院までに回収した。

なお、ご協力頂いた施設および母親や看護者には、本研究の主旨にご賛同いただいたうえで実施した。調査時間等を配慮して、質問項目は最小限とし、また、縦断的研究であることから記名方式をとったが、個人のデータの守秘に努めた。

2. 第2回調査（乳児期前期）

1) 被験者

第1回調査で協力の得られた母親33名（乳児平均月齢：3M, 2M 4M）

2) 調査期間

1999年6月 1999年8月

3) 質問紙

母親に対する育児に関する質問紙

第1回調査に対応した項目とし、赤ちゃんの性格・気質に関する項目は、乳児期前期にみられる反応を取り入れた。

手続き：第1回調査で今後の調査協力を同意が得られた68名の母親に郵送法にて、質問紙調査を行った結果、33名から協力が得られた（回収率.49）。

3. 分析方法

1) 5段階尺度で回答をもとめた各項目は、「非常にあてはまる」を5点、「ややあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「全くあてはまらない」を1点として得点化した。各項目は領域別に因子分析を行った。なお分析には統計パッケージ「STATISTICA」を使用した。

2) 母親に対する「育児に関するアンケート」で、文章完成形式の記述には、研究協力者3名が個別にKJ法に基づきグルーピングした後結果を合わせ、不一致の部分は討議の上結果とした(一致率は.92)。

結果

1. Ns. 評定による新生児行動特徴

因子分析の結果、「睡眠・覚醒リズム」、「活気」、「反応性」、「情緒安定性」、「泣き易さ」、「泣きの強さ」の6因子が得られた(表1)。図2に示すように、「活気」と「睡眠・覚醒リズム」に強い正の相関($r = .71$, $p < .0001$)、「睡眠・覚醒リズム」と「泣き易さ」に中程度の負の相関($r = -.44$, $p < .02$)があり、授乳の状態や身体生理的状态が新生児の行動に反映していると考えられる。

2. Ns. 評定による母子相互作用

表2に示すように、「応答性」「母親からの働きかけ」「母親の疲労度」3因子を抽出した。Ns.による行動評定で、「活気」が「母親からの働きかけ」に中程度の正の相関がみられた($r = .42$, $p < .03$)。新生児期においても、乳児からの反応が、養育行動を喚起していることがわかる。また、Ns.の行動評定で「睡眠・覚醒リズム」も「活気」も、「母親の疲労度」と負に相関($r = -.44$, $p < .02$ / $r = -.40$, $p < .04$)がみられたことから、「母親の疲労度」に、授乳状態や身体生理的状态が影響していることが考えられる。また、「母親からの働きかけ」と「母親の疲労度」が負に相関($r = -.39$, $p < .05$)があり、分娩経過や授乳等で母親の疲労度が高いことが予測されるケースでは、特に母親への心身への支援が必要となる。

3. 母親による乳児行動特徴認知

新生児期と乳児期前期における母親による

乳児行動特徴の認知は、それぞれ5因子、8因子を得た。両者ともNs.評定による行動カテゴリーと対応しているが、新生児期においては質問項目を少なくした影響で因子数が少なく、乳児期前期では「活気」、「反応性」でそれぞれ分化し、因子数は増えている。後者については、乳児の成長・発達に伴って、特に心理社会的側面の行動が明確になっていると考えられる。Ns.による評定と母親の認知で有意な相関がみられたのは、Ns.評定の「活気」と、新生児時期における母親認知の「活気」および「睡眠・覚醒リズム」($r = .43$, $p < .02$ / $r = .54$, $p < .004$)であった。新生児期においては、Ns.が乳児と関わっている時間帯と母親が関わっている時間帯が違うが、母児同室、別室に関わらず母親が主として関わっているのが授乳場面であることから、より一致した見解になったと思われる。乳児期前期においては、「睡眠・覚醒リズム」と「活気(栄養・食事)」が正の相関($r = .42$, $p < .03$)、および「情緒的安定性」が「睡眠・覚醒リズム」、および「反応性」とそれぞれ正の相関($r = .38$, $p < .05$ / $r = .41$, $p < .003$)がみられた。乳児期前期は依然生活リズムの確立過程にあり、授乳が順調で睡眠・覚醒リズムが安定していることは、乳児の情緒的安定や反応性に反映すると考えられる。また、Ns.の評定で「泣き易さ」が、乳児期前期の「活気(栄養・食事)」と負に相関($r = -.45$, $p < .02$)していたことから、「泣き易さ」は授乳の確立に関係していることが予測される。新生児期と乳児期前期で母親の認知で有意な相関がみられたのは、新生児期の「反応性」と乳児期前期の「反応性」および「情緒安定性」($r = .43$, $p < .02$ / $r = .38$, $p < .05$)、新生児期の「睡眠・覚醒リズム」と乳児期前期の「泣きの強さ」($r = .41$, $p < .03$)であった。

新生児期の相互作用評定で「応答性」と乳児期前期の「反応性」および「情緒安定性」に正の相関があった($r = .38$, $p < .05$ / $r = .43$, $p < .02$)。新生児期から母子相互作用で応答的なやりとりができて乳児は、乳児期前期によく反応し、情緒的にも安定していると考えられる。また、新生児期に母親がよく働きかけていた乳児は、乳児期前期において「睡眠・覚醒リズム」が安定していた($r = .46$, $p < .02$)。

4. 母親による「赤ちゃんの性格」についての

記述

新生児期、乳児期前期ともに具体的な性格を記述したものが多かったが、断定的ではなく「と思う」といった表現がみられた。また、「わからない」の回答は、新生児期では25.8%、乳児期前期では21.2%と減少しているが、すべての母親が「性格」として受け止めているわけではなかった。しかしながら、新生児期においてみられた「母親自身の期待や希望」、「両親の性格」の記述は乳児期前期ではなく、より具体的な性格としてとらえているようである。

2回調査の両方に協力の得られた33名について、具体的性格についての記述を整理してその変化をみると、必ずしも一貫しておらず、例えば「おとなしい」から「活発」のように多くが変化している(表3)。

5. 母親による「赤ちゃんの将来」への思いについて の記述

新生児期、乳児期前期ともに「健康で」、「優しい子に」、「自由に」など、漠然とした思いを表現する傾向にあった。「立派な社会人に」といった成人後に焦点をあてた具体的な記述もみられたが少なかった。母親は日々の育児へ関心が向き、「わが子をどんな子どもに育てたいか」ということについてまだ具体的にはなっていないと考えられる。また、後者はすべて男児であったことから「性役割」等の期待があることが予測され、今後継続して検討していく。

2回調査の両方に協力の得られた33名について整理すると、変化はみられるものの、5割前後は同様の内容であった(表4)。また、「赤ちゃんの性格」についての記述と明らかな関連性がみられなかったことから、乳児期前期までは、「赤ちゃんの将来」への思いは、「赤ちゃんの性格」をふまえて抱いているというよりも、母親自身の経験やパーソナリティ等が反映していると考えられる。

6. 母親による「赤ちゃんの性格」と乳児の気質および相互作用の関連

新生児期における母親による「赤ちゃんの性格」で「おとなしい」群と「活発」群とで乳児の行動特徴、相互作用を比較すると、「活発」群が「おとなしい」群より新生児期のNs. の評定による「睡眠・覚醒リズム」がより安定していて、新生児期授乳場面で「母親からの働きかけ」がより盛んだった。また

乳児期前期においても「睡眠・覚醒リズム」がより安定していて、「好奇心旺盛」であった(図3)。新生児期「睡眠・覚醒リズム」が安定している乳児は、母親から「活発」な乳児として受け止められ、「母親からの働きかけ」を促進していた。また、乳児期前期においても安定した「睡眠・覚醒リズム」や「好奇心旺盛」さにつながっていると考えられる。

新生児期における母親の「赤ちゃんの将来」への思いでは、「元気で」と記述した母親がもっとも多く、「心優しく」がそれに次いだ。「元気で」と記述した母親の乳児はそうでない乳児にくらべてNs. 評定による「泣き易さ」の傾向がより強く、「心優しく」と表現した母親の乳児はそうでない乳児より、Ns. 評定による「反応性」($p < .01$)の平均得点がより低かった。

乳児期前期における母親による「赤ちゃんの性格」の記述のちがいによる有意な関連はみられなかった。

乳児期前期における母親の「赤ちゃんの将来」への思いで、「元気で」と表現した母親の乳児は、そうでない乳児よりNs. による評定での「活気」($p < .004$)と「睡眠・覚醒リズム」($p < .007$)、母親による行動特徴認知での「睡眠・覚醒リズム」($p < .02$)、乳児期前期の「活気・栄養・食事」($p < .05$)の平均得点が低かった。また、相互作用評定における「母親からの働きかけ」の平均得点がより低かった($p < .02$)。新生児期より授乳がなかなか進まず、「睡眠・覚醒リズム」が不安定な乳児に対して母親は、より「元気で」育つことを強く望み、「母親からの働きかけ」は消極的になっている可能性が考えられる。

考 察

乳児期前期までは母子ともに生活リズムの確立過程にあると考えられ、乳児の行動特徴には、依然授乳の状態や身体生理的状态が反映していると考えられる。しかしながら、乳児の成長・発達とともにより心理社会的反応が明確になり、母親もわが子の個性として受け止めるようになってきている。乳児の行動特徴はその傾向が新生児期から一貫している側面もあるが、多くは変化している。とりわけ「赤ちゃんの性格」としての受け止めは、乳児期前期ではより明確になっているが、新生児期と内容は多くが変化している。したが

幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

って、特に母親がわが子をどう受け止めるかということは、乳児の成長・発達状況や家族関係、援助者の関わり等で変容するということである。認識や行動変容が容易な発達の極初期にこそ、個々の母子へのきめ細かな支援が必要なのである。

一方「赤ちゃんの将来」への思いは、比較的一貫していた。乳児期前期までは、「赤ちゃんの将来」への思いは、「赤ちゃんの性格」をふまえて抱いているというよりも、母親自身の経験やパーソナリティ等が反映していると考えられる。今後わが子の個性がより明確に認識されるようになると、実際の養育姿勢として示されると考えられる。また、「性役割」への期待も明確化してくることが予測される。

母親のわが子の受け止めや関わりに影響するのが、乳児の行動特徴である。授乳も順調で活気があり、睡眠・覚醒リズムが安定している乳児は、母親の働きかけを促す。逆に授乳がなかなか進まず、睡眠・覚醒リズムが不安定な乳児の母親は疲労度が高く、母親からの働きかけが消極的になっている。新生児期においても、乳児の反応は、母親の養育行動を喚起していると考えられる。また、母親の疲労度が高いことも、当然のことながら母親からの働きかけに影響している。さらに、新生児期からよく母親から働きかけをし、応答的なやりとりができていく乳児は、乳児期前期に睡眠・覚醒レベルが安定して、人や物によく反応していることから、睡眠・覚醒リズムが不安定な乳児や分娩経過や授乳等で母親の疲労度が高いことが予測されるケースでは、母子相互作用や母親への心身への支援が重要であると考えられる。

本調査は新生児期と乳児期前期の結果であるが、成長・発達とともに乳児は外界への探索行動が盛んになり、情緒表出の仕方も多様になる。したがって、養育者の養育姿勢や関わり方も変化してくると考えられる。上村による6、生後8ヶ月を境に乳児の行動傾向と母親の働きかけの関係が変わるという見解も考慮し、今後のさらに調査を継続していく必要がある。

研究の限界と今後の研究計画

本研究は縦断的調査であるため、被験者数が減少する可能性があることや、質問紙調査では乳児の行動特徴や親子関係の客観性に限界があることから、被験者の協力を得て参加観察や録画等の方法も検討している。さらに、これまでは母親への質問紙調査であったが、今後は父親にも調査協力を依頼する予定である。

結 論

1. 乳児期前期までは、乳児の行動特徴には依然授乳の状態や身体生理的状态が反映していた。成長・発達とともに乳児の行動特徴は明確化しているが、母親の受け止め方は流動的で支援の可能性が期待される。
2. 母親による「赤ちゃんの将来」への思いは、新生児期、乳児期前期ともに漠然とした内容が多かったが、後者では不明とする回答が多かった。乳児期前期までは、母親自身の経験やパーソナリティ等が反映していると予測されるが、今後わが子の個性がより明確に認識されるようになると実際の養育姿勢として示されると考えられる。
3. 乳児の身体生理的状态が不安定であったり、分娩経過や授乳等で母親の疲労度が高いことが予測されるケースでは、母親の乳児の受け止め方や養育行動への影響が予測され、特に乳児期前期までの母子相互作用や母親への心身への支援の重要性が示唆された。

謝 辞

本調査にご協力いただいた松田病院松田修典院長をはじめスタッフの方々、ならびに山下産婦人科内科小児科医院、山下通隆院長をはじめスタッフの方々、アンケートにお答えいただいたお母さまにこころより感謝申し上げます。

文 献

- 1) Klaus, M.H., & Kennell, J.H.: Parent-Infant Bonding. 2ed. The C.V. Mosby Company, 1985. (竹内徹, 柏木哲夫, 横尾京子<訳>: クラウスケネル親と子のきずな. 医学書院, 1985).
- 2) 古澤頼雄: 新生児の個体反応性. 心理学評論, 22(1), 1979.
- 3) 古澤頼雄: 発達初期における母子交互性 新生児・乳児の養育者に及ぼす影響を中心に .

幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

教育心理学研究, 23, 1975 .

4) Brazelton, T.B., & Nugent, J.K.: Neonatal Behavioral Assessment Scale. 3rd edition. Mac Keith Press, 1995. (穉山富太郎 監訳, 大城昌平・川崎千里・鶴崎俊哉 訳: ブラゼルトン新生児行動評価原著第3版. 医歯薬出版株式会社, 1998.)

5) 陳省仁, 吳敬慈: 「泣き」や「ぐずり」と乳児の発達. 三宅和夫(編) 乳幼児の人格形成と母子関係. 東京大学出版, p.p.77-94, 1991 .

6) 上村佳世子: 母子関係と子どもの気質. 田島信元 乳児の気質・母子相互交渉と自己認識形成との関連について. 文部省科学研究費研究成果報告書, 15-25, 1990 .

7) 庄司順一・副田敦裕・岩崎亜美・前川喜平: 子どもの気質に関する研究(2) 母親がとらえた新生児の行動特徴の検討 . 日本総合愛育研究所紀要, 33, 245-249, 1996 .

8) 川喜多二郎: 発想法 創造性開発のために. 中央公論社, 1993 .

9) 川喜多二郎: 続・発想法 KJ法の展開と応用. 中央公論社, 1993 .

10) 川喜多二郎: 川喜多二郎著作集 5KJ法 渾沌をして語らしめる. 中央公論社, 1996 .